

5、コロナにより試合が中断されるまで、アメリカのNBA（プロバスケットリーグ）に出場するのも活躍するのも当たり前ようになっていた、我らが八村塁選手！しかし、世界屈指のこのプロリーグと日本人で最初に契約し、試合に出場したのは、八村選手ではありません。秋田県・能代工業高校（あの有名マンガ『スラムダンク』の最後の対戦相手のモデルになった高校と言われている）の全国大会3冠3連覇の中心メンバー、田臥雄太選手だ。

この、日本バス界で最初のスーパースターの高校時代の思い出のインタビューが見つかったので、紹介します。少し古いですが、部活動で活躍する人は、それにふさわしい理由があるということが伝わったらうれしいです。

田臥が語る「能代工の憂鬱な夏」涙の夏合宿物語

秋田県北部——能代。能代工業バスケ部に入部直後、横浜からやって来た少年はつぶやいた。

「高校の練習って、こんなに厳しいのか」

繰り返されるフットワーク練習、いつ終わるやも知れぬシャトルラン。

「どんなにキツくてもやるしかない。この練習を代々、先輩たちもやってきたんだ」

もちろん当時の田臥勇太は、その練習の先に、史上初となる3年連続高校3冠を獲得することも、自身が日本人初にして唯一のNBAプレーヤーになることも知る由（よし）はない。そもそも、コートサイドの加藤三彦監督が叫んでいる秋田弁の意味すら知らない。

「こいこさ！」 フリーズする田臥に、チームメイトが慌てて駆け寄って教えた。

「早く行け！ 監督が『こっちに來い！』って言ってるぞ！」

夏休みに入り、練習は午前・午後の2部練習となった。午前は9時から2時間～3時間。午後は3時から再び2時間～3時間の練習を部員はこなした。

「夏の練習が一番キツかったですね。2部練なんで、単純に時間がいつもの倍。当然、フットワークもいつもの倍。能代の夏がさほど暑くないのがせめてもの救い。冬はものすごい寒さでしたけど」

キツかったメニューのひとつが、3選手でパスを交換しながらコートを往復するスリーメンだ。何往復するかは、監督が黙ったまま差し出す指の本数が合図となる。

「3往復くらいまでは想定内なんですけど、先生の指が4本、5本となると、内心もう、『マジか!?!』って。もちろん、驚いた顔なんてできませんでしたがね」

ただ、「もっとキツかったのがシャトルラン」と田臥は続ける。

「ボールを使った練習は、なんだかんだいって楽しめるんです。でも、ボールを使わないシャトルランは……」 フロアを5往復。真夏の体育館に、シューズがこすれる音だけが響き続ける。

しかし、中には巧妙に、ライン手前でターンをする上級生もいたという。

「サボるのがうまい人がいるんです。下級生はちゃんとラインを踏まないと、後でとんでもないことになるんですけどね（笑）。基本的には小さい選手のほうが速いんで、大きな選手でズルをする選手がいたりすると、『なんで大きい選手より遅いんだ！』って先生が怒り出すんです。だから、下級生は死に物狂いで走ってましたね」

では、はたして上級生となった田臥は、ちゃんとラインを踏んでいたのか？

「僕は遅くてもちゃんとラインを踏んでましたね。『ちゃんと踏んでるんだから遅いんだよ』って開き直すタイプでしたから（笑）」

当時、「全国優勝するよりも、能代のレギュラーになることのほうが難しい」と言われた時代。ただ、田臥には遠征で他校を訪ねた記憶がない。そのかわり、加藤監督の言葉を今も鮮明に覚えている。

「『俺たちが行くんじゃない。他のチームが来たくるのが、能代工業だ』ってよく言われました。選手にも、そう

いうプライドがありましたね。だから、夏だからといって遠征することはなかったですし、近くに寮があったので、『おまえたちは毎日が合宿のようなものだ』って言われてました」

もちろん、厳しい練習に耐えられず、逃げ出す部員もいた。

「学年にひとりはいましたね。僕らの代もいました。でも、逃げたら必ずバレるんです」

さすがバスケの町・能代。「駅にデッキイのがいたぞ。この時間にいるのはおかしいぞ」と、すぐに学校に連絡が入る。結果、逃亡者は能代駅の構内、もしくは隣の駅でマネージャーに捕まる。

「寮にみんなが集まって、逃げ出したヤツを囲んで、『もうちょっとがんばってみようぜ』って励まし合いましたね。僕ですか？ 逃げたいって思ったことはありますけど、逃げる勇気がなくて（笑）」

能代市民の多くがバスケ部のファンだった。ほとんど交通量の少ない交差点だったとしても、信号無視をするバスケ部員がいると、すぐさま学校に連絡が来た。「強いのは当たり前。部員は人としても立派であってほしい」。その期待を背負うことが、能代工業のバスケット部員になるということだった。

代々語り継がれる都市伝説があるという。

「（加藤）三彦先生も能代のOBなんですが、先生が高校生だったころ、全国大会で負けた後、店に行くと商品を買ってくれなかったそうです。『買い物をする暇があるなら練習しろ』と。反対に、僕たちが全国大会を連覇しているとき、食堂でラーメンを頼んだら、一緒にカツカレーが出てきたりしました。『これも食べな』って。いち高校のバスケ部に、これほど興味を持ってもらえる町なんて、能代以外、全国のどこにもないだろうなって。町全体がバスケ部を応援してくれていた。何て素晴らしい環境だって思いながら3年間を過ごしましたね」

ただ、夏休み1週間が過ぎたころ、田臥は最も厳しい練習がスリーメンでもシャトルランでもないことを知ることになる——。能代工業から全国に散ったOBの面々が、続々と体育館に戻ってきた。

「最初は大学生、その後に実業団でプレーしているOBが来てくれるんです。しかも、OBたちはチームメイトを誘って来てくれる」

インターハイ直前の最終調整として、まさに大学選抜、そして日本代表といっても過言ではない面々とのOB戦が行なわれた。夏の夜の一大イベントとして、この試合は大勢の市民で客席が埋まる。

田臥は1年生のときOB戦でマッチアップした選手を強烈に覚えている。長谷川誠——。能代工業OBで、松下電器1年目にチームを優勝へと導き、新人王とMVPを同時受賞した名選手だ。高校1年生の田臥がマッチアップしたのは、長谷川が全盛期の1996年のこと。

「どれだけ押ししてもビクともしない、岩のようでした。でも、少しでも弱気になったら客席からブーイングが起こるし、先生にも怒られる」

能代市民で埋まる体育館に、監督の「田臥、こいこさ！」の怒声が響いた。

「相手が誰だろうと、勝たないと怒られる。そこが能代のすごいところ。気持ちで負けるなんて話にならない。『だからおまえと長谷川は違うんだ！』って何度も怒られた。本当に試合するのが嫌でした」

あの夏の、夜の憂鬱——。連夜の敗戦が、田臥たちを強くした。まさに、『スラムダンク』の堂本監督の名言のように——「負けたことがある、というのが、いつか大きな財産になる」

田臥は言う。「敵わないし、コテンパンにされた。ただ、あのOB戦で負けたこと、稀に好勝負できたり、もっと稀に勝てたことが自信につながった。高校生同士の試合で負けるはずがないって自信をもって臨めたんです」

最後に聞いた。あの夏の練習メニュー、今、もう一度やれと言われてたらやりますか？

「どうしても、と言うなら……。もちろん、嫌ですけどね。ただ、あのときよりも、もう少しシャトルランでうまく

ごまかせるようになっているかもしれないです」

そう言って笑ったが、おそらく、田臥は今もラインを踏むはずだ。あの真夏の一步が、今の自分の土台を築いたことを知っている。なにより、サボろうとした瞬間、その脳裏に響く「こいこさ！」の秋田弁が、田臥勇太にラインを踏まないことを許さないはずだ。